「学生の学修意欲向上と特色あるプログラム構築のための国際交流インターンシップのテスト実施」調査報告

呉　起東[1]　　齋藤　史夫[1]　　木村　文香[2]

東京家政学院大学・平成30年度教育改革推進費事業において、齋藤・呉は「学生の学修意欲向上と特色あるプログラム構築のための国際交流インターンシップのテスト実施」事業を提案し採択された。2018年11月27日から11月30日、教員3名学生6名で韓国ソウル市において、子ども若者支援の施設・事業であるCJ財団夢育ちアカデミー・ソウル市ソンブク区青少年あそび場ミウムミウム・ヘソン地域児童センター等を訪問し、プログラムの体験、子どもとの交流などを行った。インターンシップとして海外研修を行なうことは困難であることが明らかとなったが、学生が教員とともに教員の研究フィールドを訪れ、その現場を体験することが、「学生の自主的学修意欲（いわゆる「気づき」を含む）を高めるための本学に相応しい教育、学修支援に関する具体的で新しい手法、教材等」の一つとなる可能性が示された。

キーワード：学修意欲　特色あるプログラム　韓国ソウル市　スタディツアー

はじめに

東京家政学院大学において、「学生の自主的学修意欲（いわゆる「気づき」を含む）を高めるための本学に相応しい教育、学修支援に関する具体的で新しい手法、教材等の開発」のため「平成30年度東京家政学院大学教育改革推進費助成」の事業が募集された。

筆者らは、「学生の学修意欲向上と特色あるプログラム構築のための国際交流インターンシップのテスト実施」事業を提案し、採択され実施した。筆者らが実施した事業の目的は、「学生の国際的視点の獲得・教育構想力の向上と、学修意欲向上を図る国際交流インターンシッププログラムの可能性を探るために、韓国財閥系財団による不登校・ひきこもり青年支援事業（夢育てるアカデミー料理部門）、市民的な子育て活動にテスト的に参加する。」とのものであった。

夢育てるアカデミー料理部門は韓国CJ財閥により設立された財団による事業であり、また、市民・行政による多様な子育て活動は、齋藤が継続的に研究している調査対象である。学生と同世代であり、また、困難を抱えている青年たちが企業の支援を受けながら学び人生を構築していく姿を見ること、また、社会的に進められている子ども支援の活動を体験することにより、学生が自らの学びを振り返り学修意欲を向上させる可能性を調査した。

4日間の韓国ソウル市を訪問した本事業において、学生たちの主体的積極的な参加の姿が見られ、短期間にも成長する姿を見ることができた。今後の、学生の成長と本学の教育・学修支援の発展に資するために、その概要を報告する。

事業実施に際して、学生からは事業実施前から、また韓国での各箇所への訪問、事業実施後も積極的に希望・感想・提案等が文書で寄せられた。それらの文書も適宜紹介する（一部抜粋）。

1　東京家政学院大学現代生活学部生活デザイン学科
2　東京家政学院大学現代生活学部現代家政学科

１．事業実施の概要

１－１　参加者（教員３名　学生６名）

教員　齋藤史夫・呉起東・木村文香（個人研究費）
学生　現代家政学科　　２年生２名
　　３年生２名
　　４年生１名
　　生活デザイン学科　３年生１名
　　合計　９名

１－２　日程・訪問先

実施日時：2018 年 11/27（火）～ 11/30（金）
実施日程
2018 年 11/27（火）
　羽田空港発／金浦空港（ソウル）着
　南大門市場・明洞散策・夕食
11/28（水）
　南山コル韓屋村　韓国伝統的家屋韓屋見学
　CJ 財団夢育ちアカデミー訪問
11/29（木）
　ソウル市庁見学
　　ソウル市子どもの権利オンブズマン訪問
　ソウル市城北区（ソンブク区）
　　青少年あそび場ミウムミウム訪問
　ヘソン地域児童センター訪問
11/30（金）
　弘大（ホンデ）エリア散策
　金浦空港（ソウル）発／羽田空港着
　空港にて研修の振り返り
2019 年 2 月 12 日
　事業報告会　町田キャンパス

２．学生の参加理由

２－１　学生からの参加申し込みまでの経過

事業実施に当たっては、前期に齋藤が担当する授業、および、木村ゼミ等にて参加を呼びかけた。その他、過去事業実施教員の授業を受講した学生、参加希望学生の友人等、20 名近い学生が参加の希望を表明した。

参加を希望した学生対象に、町田キャンパス・千代田三番町キャンパスにて、事業と訪問個所の概略説明を行い、事前学習を行った。その際、目的意識をもって事業参加ができるように、齋藤のこれまでの韓国調査報告（雑誌連載）、調査時の写真、訪問先のホームページ等を提示し学びを深めた。

実施計画と旅行会社による利用航空会社・ホテルと費用の確定をもって、学生に再度説明し正式申し込みを受けた。その際、参加意志を持ちながら、授業実施期間であり実習・演習等との関係、参加費用、などを理由に辞退の申し出があり、正式申込みは６名となった。

参加した６名のうち、３名は齋藤の授業を受講した、もしくは受講中の学生であり、また、５名は同行した木村の授業を受講またはゼミ生（今年度および来年度予定）であり、全員が２人の授業・ゼミに関わっていた。

２－２　学生の参加の理由と期待

参加を申し込んだ学生には、事前に「応募の理由」・CJ 財団夢育ち料理アカデミーとヘソン地域児童センターについて「知りたいこと、見てきたいこと」・「その他韓国訪問に期待すること」の記述を求めた。

学生の事前の期待や興味の記述（以下に記載。料理アカデミー、ヘソン地域児童センターに関しては関連する章に記載）からは

① 海外・韓国への素朴な興味
② 観光では知ることのできない海外の事情を身をもって知りたいという意欲
③ 韓国と日本との比較から身の回りの生活をよりよくするヒントを得たい
④ 身近な世代である韓国の子ども・青年の生活を見たい、また、交流したい
⑤ 自らの学習・研究を深める視点を得たい

などの点が、今回の事業への参加を希望した背景にあると考えられる。

今回の事業は学生全体に応募を呼びかけたものではないにもかかわらず、20 名近くから参加の希望が伝えられた。学生たちは、親世代の韓流映画・ドラマのブームや、近年の若い女性世代での韓国の食文化の流行や K-POP ブームなどもあり、韓国を身近に感じていると思われる。さらに、市民の生活や取り組み・同じ世代の青年や近い世代の子どもたちの置かれた状況を知ることや交流などへの意欲を多くの学生が持っていると考えられる。

【韓国訪問前に学生から提出された応募の理由】

2年生	韓国の文化や食、アイドルに興味があり、中学生の頃から韓国語を勉強していて、木村先生に今回お誘いをいただくことができたので参加することにしました。
2年生	木村先生からお話を聞いて、普段の旅行で見ることのできない韓国だなと思い、応募しました！
3年生	前期の授業の際に韓国の子ども達のビデオを観て、実際に齋藤先生が訪問すると言っていて、実際に私も行ってみて、韓国の子ども達と関わってみたいと思ったからです。
3年生	友人に誘われ、興味を持った為。
4年生	「子ども自治会」の子どもが主体となり行動する取り組みや、CJ財団の就労支援を通して自尊感情を上げるプログラムに興味を持ったため。

3．研修実施の状況 1―11月27日（火）訪問初日

3－1　活動の概略

金浦空港（ソウル）着後　入国手続き・鉄道にてホテルに移動

　デポジットのついたチケットを各自購入

ソウル二大市場の一つ南大門市場と明洞散策

　韓国の国宝第1号崇礼門等見学

南大門市場にて夕食

3－2　11月27日の様子

　羽田空港集合時には、担当旅行社であるHISから担当者2名も対応。

　2つのキャンパスに分かれた本学では、今回初めて出会う学生もいるため、集合時には自己紹介などもして、集団の形成を心がけた。

　現地では、できるだけ韓国市民とふれあい、生活を体感できるように、交通手段には、主として鉄道・バス・徒歩を利用することとした。宿泊は、交通至便かつセキュリティもしっかりしており、自由行動も安全で、なおかつ移動の際も分かりやすい地域にあるホテルを選択した。

　ホテルにチェックイン後、全体で徒歩にて明洞へ向かう。途中、韓国国宝第1号である崇礼門、日本植民地時代の建築である韓国銀行、ロッテデパート・新世界デパートの豪華なクリスマス・イルミネーションなどを見ることができる経路を選択した。その後、明洞での自由行動の時間をとった。集合後、ホテル近くに戻り、現地の人が行く市場内の食堂での食事とした。

3－3　初日終了後の学生の感想から

　初日の感想（以下に記載）からは、海外に出かけ街を歩くだけで、学生は多くのことを感じ・考えていることが見て取れる。妊婦専用に区画された座席シートに置かれたかわいい妊婦の人形に感心するなど、移動手段として鉄道を利用したことによる発見もあった。切符を自ら購入する、食事の場所も市場内で韓国の人が行く店を選ぶなど、現地の市民となるべく同じように行動・生活することで、多くの発見をしていた。

　現地では、安全な場所を選定し、必ず複数で行動するなどの配慮をしながら、学生だけで行動する時間を作ったことも、挑戦・楽しさ・交流を生む要因となったと考えられる。そのことが、4日間ともに行動する参加メンバーのグループ形成へとつながった。

【初日の学生の感想】（一部抜粋）

2年生	久しぶりの韓国で、とてもワクワクしました。見るもの全てがハングルでとても新鮮でした。 観光では行けないようなお店で夕食を食べられたり、皆さんと少しずつお話しすることができてとても楽しかったです！
3年生	着いた瞬間に胸が高鳴り、テンションがハイになりました。久しぶりの海外は新鮮で、見るもの全てにウキウキが止まりませんでした。･･･少しでも知っている韓国語を使い、現地の方とコミュニケーションを取りたいと思いました。2日目は韓国語をもう少し使う勇気を出すことと、お財布にも体にも優しく楽しみたいと思います。
3年生	初めての韓国訪問で、全てが新鮮でとても楽しかった。電車の優先席の事など、自国以外の言語でも説明をしていてとても感動しました。･･･初めてハングル語に触れて、何もわからなかったが、ジェスチャーを使ったり自分なりに伝える事が出来た時は嬉しかったです。

4年生	1. 自由行動の際、コスメショップでお買い物をした。その際に気になったこと。 ①自国への思いと販売行動との関連性について（略）②韓国の国民性について（略）③おまけ文化について（略） 2. 食事の文化について 全員で夕食を共にした際、韓国と日本の食べ方の違い、カトラリーの使い方の違い、食事に対する考え方の違いが印象的であった。（略） 3. 環境問題に対する意識について 環境問題について意識が高いと思われる点と、逆に意識が低めであると考えられる点について興味を持った。 ①意識が高いと感じられた点（略）②意識が低めであると感じられた点（略） 4. 街の活動時間について（略）

4．研修実施の状況 2―11 月 28 日（訪問第 2 日）

4－1　活動の概略

午前　南山コル韓屋村　李氏朝鮮時代の貴族の屋敷・伝統的な家屋など見学

A Twosome Plase にて昼食（CJ グループのカフェ・韓国内に 1000 件以上展開）

午後　CJ 分かち合い財団夢育ちアカデミー料理部門訪問・見学・プログラム体験（BLT サンドウィッチ・サラダ調理）

インタビュー

CJ 財団ミン部長・DreamCook ヤン CEO

学生記者団（CJ 財団インターン）にインタビューを受ける

4－2　CJ 分かち合い財団夢育ちアカデミー料理部門訪問

(1) 夢育ちアカデミー料理部門の概要

夢育ちアカデミーは、韓国財閥のひとつ、CJ 財閥（エンターテイメント・食品グループ）が設立した CJ 分かち合い財団による社会貢献活動である。料理部門では、貧困などの困難を抱えた青年を公募（36 名）し、半年のコースを修了すると正社員となることを約束されている。

財閥の経営する食料域の、カフェ・ベーカリー・集団給食の三部門で実施されている。また、新規の部門として、サービス部門も開始された。

(2) 訪問前の学生の期待

CJ 財団訪問前に寄せられた、学生の期待は以下である。

【CJ 財団の夢育ち料理アカデミーについて知りたいこと、見てきたいこと】（一部抜粋）

2年生	どのような人々が働いているかを見たいです。
3年生	韓国の方たちが、どのように社会で生きているのかを実際に見たい。
3年生	どんな料理があるか、辛いものばかりなのか。
4年生	CJ 財団「夢育ちアカデミー」において知りたい内容は以下の 4 点である。 1. 困難を抱えた青年と困難を抱えていない青年、または、困難を抱えた青年同士はコミュニケーションをとっていくことに難しさを感じないのか。 2.「夢育ち料理アカデミー」には誰が、どのような思いで応募・参加するのだろうか。 3. 自尊感情を高めることも目的のひとつとのことだが、具体的にはどのような方法にて自尊感情を向上させているのか。 4. プログラム全体を通して、工夫している点、困難さを感じている点、はどこか。

(3) 訪問時の様子

施設見学

料理部門・サービス部門

CJ 財団ミン部長・料理アカデミーヤン CEO からの事業説明

ヤン CEO の指導で BLT サンドウィッチ・サラダ調理体験

A Two Some Cafe にて提供されているレシピ

インタビュー

ミン部長・ヤン CEO・教育生 2 名

CJ 財団インターン・学生記者団によるインタビューを受ける。

(4) 訪問後の学生の感想

韓国訪問前に寄せられた期待は非常に漠然としたものであったが、訪問・見学し、事業の説明を受け、実際にプログラムで行われている調理を体験し、また、同世代である学生インターンのインタビューを受けることで、多くのことを感じ、考

えている。

韓国の大企業による、同世代の若者支援の実際を体験し、その事業の持つ意味を考えるとともに、日本社会のあり方を考えるきっかけや、自分の人生を考えるきっかけともなったようである。

【CJ 財団訪問後の感想】（一部抜粋）

3年生	2日目は、CJのアカデミーに訪問させて頂きました。始めの方に見た、少年がYouTubeを見ながら鉛筆を包丁に見立て、食材を切る練習をする映像を見て、大きな衝撃を受けました。就職したい、学びたいと自ら願い、能動的に学習に取り組む青年たちの映像が頭の中で浮かび、胸が熱くなりました。
3年生	・大企業が格差を縮小させようとする取り組みをするという点に感心した。 ・夢育ちアカデミープロジェクトは内容的に新人研修と何が違うのかという疑問があった。（理念が違うことはわかった。） ・長所を伸ばそうとする教育というのが魅力的だと思った。
4年生	現状が変化しない背景として以下の3点が問題として考えられるのではないかと推察した。ⅰ）現状を変えたいのかという意識の問題、ⅱ）コストの問題、ⅲ）良い人材（教育者側）を確保するという問題 理想と現実のバランスを取っていくことの難しさを実感したが、問題意識を持つことができたという面においてはほんの少しだけ新たな世界を知ることに繋がったのではないかと思う。問題意識を持ちつつ、今後の学びに繋げていきたいと思う。

5．研修実施の状況 3―11 月 29 日（訪問第 3 日）

5－1　活動の概略

午前　ソウル市庁訪問・施設見学

午後　ソウル市ソンブク（城北）区青少年あそび場ミウムミウム訪問・事業説明・見学
ヘソン地域児童センター訪問見学・センター長インタビュー・小学生との交流

5－2　ソウル市庁訪問

(1) 訪問の概略

ソウル市庁見学　市民ボランティアの案内にて
旧植民地時代の市庁舎を改築した図書館
超近代的建築のエコロジー・ビルの新庁舎
ソウル市人権オンブズマン・キム氏面会

(2) 学生の感想

建築を学ぶ学生は、特に建物の歴史・構造などに興味を持った。また、行政のあり方や、ユニバーサルデザインなどにも視野を向けていた。

【ソウル市庁訪問後の学生の感想】（一部抜粋）

2年生	3日目。初めてのソウル市庁で、建物の構造や工夫、建築様式など、色々なことを学ぶことができました。旧ソウル市庁の図書館も西洋のような様式でとても綺麗でまだまだ見ていたいくらいでした。
3年生	ソウル市庁では、模型やツアーを通して、ソウルという都市の様々な意味での“大きさ”、市長へポストイットで意見を直接伝える事ができること、環境に配慮したつくり、障がい者の積極的な雇用をしている事などを知る事ができた。

5－3　ソウル市ソンブク（城北）区青少年あそび場ミウムミウム訪問

(1) 訪問の概略

青少年あそび場ミウムミウム施設見学
施設、活動紹介ビデオ視聴
オ・ソンブク区教育子ども若者オフィサー・オンブズパーソンからの事業説明
遊びキュレーター（音楽・美術専門家）インタビュー

(2) 訪問時の様子

ユニセフから「子どもにやさしいまち」として認証されているソンブク区での、子どもの権利条約 31 条の理念に基づいて 4 カ所建設されている、12 歳から 19 歳の子どもを対象とした青少年遊び場のひとつ。施設は「将来の顧客のために」と区が説得して、地域銀行の 2 階を無償で借り受け開設している。

建設段階から子どもの参加を位置づけている。子どもの日には、地域全体が子どもの遊び場である象徴として、区役所前で遊びのイベントを開く。その際には、青少年遊び場を利用する子どもと遊びキュレーターが協力して計画を立案・実行して

いる。

(3) 学生の感想

自分たちに近い世代(12～19歳)を対象として、競争の教育の過熱の下での自殺の増加などに対して、区が休息や遊びを重視し、若者自身の参加をすすめながら地域企業の協力も得て魅力的な施設を建設運用していることに強く興味を引かれていた。

施設の説明を受けた後も、責任者、遊びキュレーター（音楽と美術の専門家）への質問が止まず、移動の時間が迫ることにやきもきするほどであった。メンバーの１人は、日本の子どもの放課後活動でアルバイトをしており、そのことから日韓の子どもの放課後施策・施設の比較に思いをはせていた。

【ミウムミウム訪問後の学生の感想】(一部抜粋)

2年生	미음 미음 では、子ども達の遊びの時間や余暇を大事にしたいという気持ちがとても伝わってきました。 空間が私にとってとてもわくわくしたし、勉強したり、レポートをしたりするのにとても良い空間だと思ったので、やはり対象年齢が適するように作られているなと思いました。
3年生	青少年の自殺の最大の理由として、勉強（競争社会）から離脱して行き詰ってしまった為というのが挙げられるのは悲しい。 子どもに憩いの空間を与え、余暇を楽しんでもらうというのは有効な方法だしいい事だと思う事だと思った。

５－４　ヘソン地域児童センター訪問

(1) 訪問の概略

壁画による地域おこしをしているセンター周辺地域散策

ヘソン地域児童センター施設見学

子どもの活動見学

音楽レッスン（各パート・オーケストラ)・宿題・遊び

キムミア・センター長インタビュー

子どもたちとの交流

地域児童センターは日本の学童保育と類似する施設である。民間による放課後の子どもの居場所として開設が進められ（当初「コンブバン」(勉強部屋))、その後、韓国児童福祉法に位置づけられる児童福祉施設となった。現在、約4000カ所設置。韓国保健福祉部が推進する、子どもの貧困対策施策「ドリームスタート事業」によって措置される子どもの放課後の居場所ともなっており、夕食、長期休暇時の昼食も提供されている。

ヘソン地域児童センターは、コンブバン時代からの歴史のあるセンターであり、地域で子どもが育つこと、子どもの自治、文化的活動を重視している。

訪問時には、小学校３年生以上の子どもたちが、バイオリン・チェロ・フルート・クラリネットのグループレッスンをしており、その後、部屋いっぱいに椅子を並べオーケストラの練習を行っていた。練習する曲はミッションインポッシブルのテーマ・スターウォーズのテーマであり、格好良い曲を颯爽と演奏する姿からは、日常の生活も前向きに自信を持って過ごしているであろうことが察せられた。

(2) 訪問前の学生の期待

【ヘソン地域児童センターについて知りたいこと、見てきたいこと】

2年生	日本の児童館との違い、日本にも取り入れた方がいいこと。
2年生	子ども達の様子を見たいです。
3年生	日本の児童館と韓国の児童館の違いや、似ている点を知りたい。どうしたら、良いより児童館にすることが出来るのか、良いところを見たい。
3年生	子ども達がどのような遊びをしているか。勉強大国であるが、自ら勉強をしたいという児童がいるのか。(遊びの中に勉強が組み込まれていたりするのか)
4年生	ヘソン地域児童センターにて知りたい内容は以下の３点である。 1.子どもの居場所を提供するだけでなく、芸術や文化を重視するようになったきっかけはあるのか。 2.「子ども自治会」のような子どもを主体とする活動を上手く成立させるポイントは何か。 3.子どもと接する上で大人が気をつけていること、重視していることは何か。

(3) 学生の感想

子どもたちのオーケストラの練習終了後には、学生たちは子どもたちの中に積極的に入り、日本語と韓国語を教えあったり、一緒に韓国のゲームをしたりなど交流をしていた。「貧困」の子どもという言葉のイメージを超えて、明るく積極的に暮らす子どもの姿から大きな印象を得たようである。同時に、日本における課題と、その解決にも視野が向いていた。

【ヘソン地域児童センター訪問後の学生の感想】

2年生	ヘソン地域児童センターでは、まず施設の数に驚きました。それほど韓国には経済的に厳しかったりする家庭が多いのだなと感じました。親たちがお金を出し合って、村の中で子ども達を育てるという事はとても良い事だなとわたしは思いました。子ども達が楽器を演奏しているところを見てとても楽しそうに思いました。みんなとても明るかったです。
3年生	ヘソンでは、想像以上に子ども達が元気いっぱいで、問題を抱えているようには全く感じる事がなかった。実際に現場へ向かい、目ではわからない事をインタビューを通して様々な内情を知る事ができた。あまりにも充実しすぎていて、保護者たちがもっと収入を上げる努力をする事ができるのか疑問に感じた。
3年生	・無料でここまで出来るのかという驚きがあった。 ・子どもたちが自主的に活動に取り組んでいるようだったのですごいと思った。 ・貧困層と言われる子どものうち半数しか施設を利用できてないと言っていたので、新しく作られる約3千の施設でもう半数の子どもたちが利用できれば良いと思った。一般対象に作ると話していたので現実的ではないと思うが。 ・“子どもを放置せず、地域みんなで育てていく”というポリシーは大切だと感じた。 ・スタッフや講師がボランティアでなくしっかり報酬を得ていることに感心した。 ・韓国の財政状況と少子化という所に暗くて大きな課題があることが感じられた。 ・競争社会は韓国ほどではないのかもしれないが、日本もそう変わらない課題を抱えている気がするのに感じさせないのが怖いと思った。 ・弱点にもしっかり目を当てて向上心をもって取り組んでいる姿は見習うべきだし、高齢者支援だけでなく18歳までの子どもにもっと焦点を当てた取り組みを日本でも広げていかなければならないと思った。
4年生	2. ヘソン地域児童センター ①村全体で子育てをするという考え方が素敵だと感じた。子どもたちの居場所でありながら、村の人の居場所でもある。参加し、交流することが出来る場があることは良いことだと感じる。 ②子どもはとても明るく、楽しい時間を過ごすことができた。楽器を使い一生懸命練習している様子や、人懐っこく明るく近寄って来てくれる様子からは「貧困」という雰囲気を感じることがなかった。だからこそ不思議な感覚でもあった。 ③言葉が伝わらなくてもジェスチャーや紙とペンなどを用いてコミュニケーションをとることができることの楽しさを知った。人と人とが関わるうえで言語が通じるに越したことはないのかもしれないが、そうでなかったとしても相手のことを“知りたい”と思う気持ちや相手に“伝えたい”という気持ちがあればコミュニケーションは成立するのだと感じた。 ④ ③に表記したように、言葉が話せなくてもコミュニケーションをとることは可能だと言うことがわかった。しかし、そのように思う反面、やはり話してくださっている人の言葉を“そのまま聞いてみたい”、“直接自分の意見を言えるようになりたい”、などという風にも感じた。ほんの少しのニュアンスの違いによって言葉の意味が異なることもある。異国であれば文化的背景や社会制度が異なることもあり、余計に相手の言葉をそのまま聞いてみることが必要となるように感じた。完璧に理解することが出来なくとも、ニュアンスを感じ取ることによって自分と相手との社会的・文化的な理解の差を縮めることに繋がるのではないだろうか。

６．研修実施の状況 4—11 月 30 日（訪問第 4 日）

６－１　活動の概略

午前　ホンデ（弘大）地区散策・食事

韓国を代表する美術家やデザイナーを輩出してきた美術大学・弘益大学周辺の韓国の流行の発信地

午後　金浦空港発・羽田帰着

羽田空港にてふり返り

７．結果と考察

７－１　学生の感想

事業実施後、学生から総括的な感想を求めた。

学生からは積極的に感想が寄せられ、また、後日にも、事業への提案なども届けられた。

その特徴を整理すると、

①韓国の子ども若者支援の取り組みに大きな感銘を受けるだけではなく、ソウル市の街の様子・建築・日常生活等からも多くのことを感じていた。

②そのことは、同時に日本そのものも問い直すものであった。

③それらが初めて出会った他学科・他学年の学生との出会いと集団の形成によって、より学びが深まった様子もうかがえる。

④そして、そのことによって自分自身の学ぶ姿勢や日々の生活の問い直しにもつながっている。

⑤事業の実施の方法についても意見・提案が寄せられ、事業への主体的積極的な参加の姿勢があった、

などがあげられる。

全体を通して、本学学生は、社会に広く足を踏み出し、今日の社会的課題の現場での体験をすることによって、学修への意欲を高め、自らの人生を豊かにしていく大きな可能性があることが見て取れる。

【4 日間の感想】（一部抜粋）

2 年生	毎日すごく楽しくて、あっという間に過ぎてしまいました。私が 1 番印象に残ったのは CJ です。ここに行かなければ自分が気づけないことがたくさんありました。学びたくても、貧しいことが原因で学校に行けない同世代の子がいることについて、これは私にとって知っているようで知らない事実でした。この現状を知って、自分がいかに豊かに生活し、めぐまれた環境にいるという事を実感できました。また、正直私は日々適当に生活してきましたが、CJ に通う学生たちをみて、全てのことに一生懸命に取り組まなくてはならないなと、改めて思いました。 今回の韓国訪問はすごく勉強になりましたし、今後自分の人生になにか繋げていければいいなと思いました。
3 年生	今回の韓国訪問で、訪問した場所を見て韓国全体で子ども達をとても大切にしていると思いました。出生率が低いのに、競争社会の為に自殺してしまう子ども達が多い事にとても驚きました。その中で、子ども達は本当に宝のような存在で、ヘソン地域児童センターなど、「家族、先生、村全体で子ども達を育てる」という事に、本当に感激しました。それを実際に行動にうつして、児童センターなど、金銭的な面で全て無償という事にも本当に驚きました。実際に、子ども達に会うと本当に笑顔で、このような空間がある事でより知識をつけたりすることが出来て、とても良い環境だと思いました。日本にもこのような施設が、もっと広まり日本全体で子どもを育てようという気持ちを持てるようになりたいと思いました。 この 4 日間は本当に貴重な体験をすることができ、先生方や一緒に行った学生のみなさんと訪問することができて、本当に良かったです。
3 年生	・下調べをもっとしなければいけなかった。 ・買い物の時間が多かった。 ・毎日全員で今日の目標やポイントを確認してから出発し、毎日全員で振り返りの時間を設けると他学科、他学年、先生といった意味がもっと出たと思う。 ・自分が感じたことを移動の道中で先生に話し、すぐにフィードバックが貰えたのが良かった。 ・子どもたちが可愛かった。
4 年生	韓国訪問 4 日間全体を通して感じたことを感想として以下に記す。 1. 異文化理解 1-1. 食文化（略） 1-2. ファッション（略） 1-3. 街のつくり（略）

2. 学科間・学年間交流
今回の韓国訪問では、普段交流することの少ない学科間・学年間の垣根を越えた交流を行うことが出来た。･･･今回初めて会った子とこんなにも仲良くなることが出来るとは思っていなかったためとても嬉しい。

3. 自由行動
今回、自由行動が思っていたよりも多くあったことが嬉しかった。自由行動は個々が主体的に行動するため、文化を感じること、外国語を使用する機会であること、自分たちで好きなことを出来ることなどの理由から良いと思う。また、“言葉が通じた！”“自分たちの力で行動できた！”などの成功体験は自己効力感を高めることにも繋がるのではないかとも思う。

4. 期間の妥当性
3泊4日という期間は丁度良い長さであったと感じる。理由は以下の3点である。
①次へつなげるため（略）②学びをまとめるため（略）③疲れをためないため（略）

5. まとめ
今回の韓国訪問で様々な取り組みや新たな文化に触れることが出来た。今回の経験から得られたことも多かったが、そのことと同時に日本という国の現状を知らない自分にも気が付かされた。他国の良い点を取り入れるにはまず自国のことを理解することが必要だと感じる。今回の訪問から意識を変えることが出来たため、日々の何気ない暮らしを知ること、多くの経験をすることなどからより多くのことに目を向けていきたいと思う。

【終了後寄せられた意見】

韓国訪問今後の課題
1. 金銭面の問題
今回、学生の中にはプログラムに参加したいという意思はあるものの、金銭的負担が大きいために断念せざるを得ない者がいた。金銭的負担に関しての課題点を以下に記す。
①渡航費用の高さ
②全額自費という面
③大学と学生の両方にメリットがあるシステム構築の必要性（感想などを書いたら少額でも返金されるシステムなど。）

2. 人数の妥当性
2-1 今回のプログラムの特徴
今回のプログラムの特徴として、バスや電車など公共交通機関を利用したことが特徴としてあげられる。また、街中の徒歩移動もあった。

2-2. 今後の人数
今後、プログラムを実施するにあたって適当であると思われる人数は最大8名であると考える。
理由は以下の点である。
ⅰ）本プログラムの特性上、公共交通機関等を利用しても教員が把握しやすい人数であるため。
ⅱ）学生間のコミュニケーションが取りやすいため。
ⅲ）受け入れ協力施設側に負担をかけ過ぎないため。

3. プログラムの必要性
今回のプログラムは、個々の学習意欲を引き出すだけでなく、生き方を考えるきっかけにもなっていたように感じる。プログラム参加者の中には新たな夢をえがく者もいた。韓国訪問を通して、新たな世界に触れた者、現在の経験を生かし世界を広げられた者、新たな可能性を感じた者などタイプは様々であるが、参加した学生全員が良い刺激を受けて帰国したと同じ学生の立場から感じている。
「何かしてみたい」「変わってみたい」「でも、何をしたらいいのか分からない」そのような悩みを抱えた学生に将来を考えるきっかけを与えることも大学の使命の一つではないだろうか。そのためにも、今回のプログラムは非常に有意義であり、必要性の高いものだと言えよう。

プログラム早期導入の必要性
今回4年生からの参加は1名であった。私自身は進学を希望していたのでよいタイミングではあったが、本学の割合としては就職をする者が9割を占めており、3年次には就職活動を意識するという傾向にある。就職活動や教育実習の時期が3年次後期から4年次にかけて行われることを考慮すると2年次や3年次に今回のようなプログラムに出会えていると良いのではないかと考える。
プログラム早期導入のメリットは以下の通りである。
1）プログラム参加後に進路を考えるゆとりがある
2）就職活動や教育実習などの時期とかぶらない
3）プログラムにて感じたことを講義と結びつけることができる（プログラム経験による学習意欲増進の可能性）

7－2　韓国での研修を通して見られた学生のウェルネスの向上（木村文香）

大学進学率が6割に近づいている今日、大学には多様な背景の学生が入学しているとされている。本学においても同様の状況が生じている。そのような中、現代の学生の問題に対応するには、学習、健康、生活の3つをリンクさせた心身の総合的な健康、すなわちウェルネスの獲得を目指し、対応を体系化することが急務であると考えられている。ウェルネス；wellnessとは「健康を維持するための社会・情緒的なコーピングスキルを含む

身体的・精神的な健康」であり、個人的な well-being、アイデンティティの発達、個人的な目標の達成を含むものである（e.g., Maton et al. 1998; Maton & Wells, 1995）。ウェルネスの獲得が自己効力感を上げ、学生が個々に抱えている問題を顕在化させづらくするため、大学への適応感が増すと考えられる。

既に多くの大学は、様々な初年次教育の取り組みを行っている。学習面ではアカデミックスキルの獲得を目指す少人数制授業の必修化、健康や生活面ではメンタルヘルスやキャリア形成に関する講演会や、宿泊を伴うフレッシュマンキャンプが挙げられる。しかし、そこで得られた短期的な効果の検証は行われていても、長期的な効果や、持続のための試みについてはまだ十分に行われているとはいえない。つまり、ウェルネスの獲得につなげるような取り組みはまだ十分に検討されていないのである。

本研修への参加者は、少人数であり、さらに本人たちの希望による参加であったため、彼らの状況を一般化することは難しい部分もある。しかし、彼らの様子は、それぞれ置かれている学年に応じた、十分なウェルネスを獲得していると考えるに充分であったことがわかる。その背景にあるのは、学年とキャンパスを超えた学生の集団凝集性の向上ではないかと考える。

今回の参加者は、異学年、異学科の集団であり、結果的に通常学ぶ場が異なっていた。しかも、事前に全員が顔を合わせる機会ももてなかったため、集団形成の初期段階である、集団境界の確立は、LINE グループによるものとなった。初めての顔合わせの場であった羽田空港での集合の際にも、全員がそろったのは搭乗直前であり、さらに機内の座席位置も、集団の発達段階を初期から中期に上げるような取り組みを行えるようなものではなかった。その後も移動が続いたため、結果的に、グループアプローチとして凝集性を上げるような意図的な試みを行うことは困難であったといえる。

しかし、今回の研修期間中に、参加者たちは１つの集団としての凝集性を高めたといえる。この背景の１つには、今回の研修プログラムの内容が、ストレングスモデルとなっていたことがあるといえる。これは、各集団成員がもつ強みが十分に活かされるような内容であったということである。つまり、研修期間中に、参加者のもつ負の部分が引き出される場がほとんどなく、彼らが興味を持ち、楽しいという気持ちで向き合えるものばかりであったことから、それぞれの持つ良さが十分に引き出され、良好なグループダイナミクスが生じたと考えられる。このことから、凝集性が高まったと考えられる。結果的に、彼らのウェルネスの獲得にも貢献できたと考えられる。

意図して良好なグループダイナミクスを生じさせ、集団凝集性を上げ、そこからウェルネスの向上につなぐ方法については、詳細なプログラムの検討が必要となると考えられる。しかし、参加者が関心を持つ内容を十分に体験することができる海外研修は、参加者の関心と、研修内容のマッチングが十分に行われていれば、緻密に構成されたプログラムと同様の効果を生むことも、１つの可能性として考えることができるのではなかろうか。

７－３　KVA 精神を学生に培う海外研修

今回の訪問を通して、学生にとって、本学の理念である KVA 精神の涵養、大江スミが掲げた「人々のしあわせにつながる家政学」への学修意欲を高め成長するために、海外研修が大きな可能性をもつと考えられる。

本学の求める学生像（Admission Policy）は「本学建学の理念、教育についての考え方に共鳴する人・自ら率先して行動し、他者を理解しようとするあたたかな心を持つ人・多面的な視点で、生活のあらゆる領域から社会を学ぼうとする好奇心に溢れた人・歴史を振り返り、世界に視野を広げ、人間としての多様な生き方、働き方を求めたい人・本学で学んだことを活かし、社会に貢献するために他者との協働を積極的に行う共感力を持とうとする人」である。また、学位授与の考え（Diploma Policy）では「人間社会と自然の多様性を豊かな知識と深い思考をもって理解し、そのあるべき姿を的確に判断して提案できる能力・社会を構成する大切なひとりとして、高い徳性をもって人々のために働く能力・学修で得た専門的技能（技術）

をもって人間社会と自然の中に課題を発見し、課題を論理的に分析・総合し表現することで他者との共感を創り出す能力」を身につけることである。

本事業の４日間の研修参加学生からは、アドミッション・ポリシーに示された学生の姿が見え、ディプロマ・ポリシーに示された能力を培う意欲を高め成長する姿を見ることができた。

実施に際しては、引率教員が現在研究対象としている現場に学生を同行したことも、成果を大きくしたのではないかと考えられる。

ただし、インターンシップについては、日本の状況と海外の状況は異なり、また、困難を抱えた若者との接触については大きな配慮が求められることもあり、海外研修をインターンシップとして行うことは難しいと考えられた。そのため、海外研修をスタディーツアーなどの形態で行うことが妥当と考えられる。

７－４　双方向の交流の可能性

日本からの学生の訪問によって、ヘソン地域児童センターの子どもたちは日本を身近に感じ、興味関心を深めたという。それは、日本・日本語について調べはじめる、訪日が予定されているセンター長に同行したいと強く希望するなど、「日本ブーム」と表現できる様子だと伝えられた。交流を通して、本学学生の成長、本学の発展に止まらず、訪問先の事業発展に資する可能性もあると言えるであろう。

CJ 財団では、今回は困難な背景を持つという教育生への配慮から若者との交流は限定的に行われた。今後は、家政学の大学の特色を活かして日本の食やファッションを紹介するなど、先方の事業に貢献できる可能性を探ることも可能ではないかと考えられる。

そのためには、交流を複数年に渡って継続することも必要であろう。

おわりに（学内事業に関する提案）

今回の事業は、教員が現在研究を進めている最前線とも言える研究フィールドに学生を引率し、その現場での体験から、教員の研究の意義、学問の役割を理解し学生自身の成長につながる可能性を調査するものであった。このような事業は、「学生の自主的学修意欲（いわゆる「気づき」を含む）を高めるための本学に相応しい教育、学修支援に関する具体的で新しい手法、教材等」の一つとなる可能性が示されたのではないかと考えられる。

今後、本学において①国内・海外へ教員が引率して訪問・見学・学習体験する事業・スタディツアーなどの充実をはかる、②教員が学生を国内外に引率することを可能とする制度、例えば「学生指導出張旅費」「国内・海外への学生引率プログラム助成制度」の創設、③事業実施にあたって学生への一部補助・学生補償制度（傷害補償）の適用などが考えられる。

筆者らも、今後とも学生の自主的学修意欲の向上に資するため、日々の研究教育活動を進め、本学の発展を実現するためにより努力を強めたい。

本報告のまとめに当たり、教育改革推進費事業に採択いただき、新しい試みを実施させていただいた本学に感謝申し上げます。

（参考図書・文献）

天野郁夫『大学改革を問い直す』慶應義塾大学出版会、2013 年

松下 佳代・京都大学高等教育研究開発推進センター（編）『ディープ・アクティブラーニング』勁草書房、2015 年

NPO 法人日本希望製作所著・発行『まちの起業がどんどん生まれるコミュニティ』2011 年

齋藤史夫「韓国子ども事情１　韓国市民運動の衝撃　市民力で創る子育てとコミュニティ」『子どものしあわせ』本の泉社、2018 年４月号

増山 均・齋藤史夫「韓国・子ども事情２　日本の学童保育と瓜二つ　ヘソン地域児童センター」『子どものしあわせ』本の泉社、2018 年５月号

齋藤史夫・中村興史「韓国・子ども事情 4　財閥による就職までの子ども・若者支援」『子どものしあわせ』本の泉社、2018 年７月号

南銀伊「韓国・子ども事情９　子どもにやさしいまちづくり」『子どものしあわせ』日本子どもを守る会、2018 年 12 月号

（受付　2019.4.2　受理　2019.6.6）